

(研究報告) 抄録用紙

|                    |                                                        |
|--------------------|--------------------------------------------------------|
| 演題名<br>(全角 80 字以内) | 在宅終末期ケアにおける多職種連携の実態調査 (第 2 報)<br>多職種連携行動の関連要因          |
| 演者名                | 乙黒千鶴 1)、藤田淳子 1)、辻村真由子 2)、池崎澄江 2)、<br>福井小紀子 1)、磯野有樹子 3) |
| 所属                 | 1) 日本赤十字看護大学 地域看護学<br>2) 千葉大学大学院看護学研究科<br>3) 長野 新生病院   |

|                                     |                                                                                                                      |     |
|-------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 研究方法<br>(右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください) | 1. 症例報告      2. 症例シリーズ報告      3. コホート研究<br>4. 症例対照研究      5. 調査研究      6. 介入研究      7. 二次研究<br>8. 質的研究      9. その他研究 | NO. |
|                                     |                                                                                                                      | 5   |

目的

第二報では、研究チームが開発した連携行動尺度を用い、各職種の連携行動を高める要因は何かを明らかにする。

方法

調査方法は第 1 報参照。調査内容は、①利用者の背景、②各職種の属性、③過去の連携経験、④今回のチームにおける連携(顔の見える関係評価尺度、連携意識尺度(TCI))⑤連携行動尺度について尋ねた。

分析方法は、連携行動尺度の合計点数と①～④との関連性を重回帰分析する。なお、本研究は、研究者の所属大学倫理審査委員会の承認を得て、平成 25 年 10 月～12 月に調査を実施した。

結果

医師・訪問看護師・ケアマネージャー・遺族からの回答が揃った 48 事例を分析対象とした。医師の連携行動得点を高めたのは、多職種合同の研修や多職種連携カンファレンスに参加している、利用者宅へ頻回に訪問している、訪問看護師との連携が取れている、連携意識得点が高いことであった。訪問看護師の連携行動得点を高めたのは、在宅経験年数が長い、連携意識得点が高いことであった。ケアマネージャーの連携行動得点を高めたのは、顔の見える関係や連携意識得点が高いこと、利用者宅へ頻回に訪問している、医師との連携が取れることであった。

考察

医師は、研修会参加など地域に出て、他職種の役割を知ることが連携行動を高めるために必要である。訪問看護師は、在宅経験年数＝豊富な経験であり、状況に影響されず連携行動が取れる。ケアマネージャーは、繋がる連携から、調整・協調へと意識が高まり、行動力へと繋がる事が示された。終末期では特に医師は訪問看護師と、ケアマネージャーは医師との連携で連携行動が高まるという側面も示され、間に入る訪問看護師のチーム内での役割がチーム連携の肝になっていくことが予測された。